



思いやる心を育みたい

安城中部小学校校長 吉本 敦

新年度が始まり、一か月が過ぎようとしています。毎朝の登校時に大東町の交差点で旗当番の方と一緒に子どもたちの安全を見守っています。高学年の子が1年生の手を引いて横断歩道を渡っていきます。1年生の歩くペースに合わせてゆっくりと歩いているのですが、信号が点滅に変わることも予想しながらちょっと早めに……。でも1年生にとって無理のない速さで……。歩道橋の階段を1段ずつゆっくりと上がる1年生。「頑張っ！」と、声は出さなくとも、応援しているかのように見守る高学年。通学班のみんなも1年生にペースを合わせます。昇降口に着くと、急いで自分の靴を下駄箱に入れてシューズに履き替える高学年の子。すぐに1年生の所に戻り、また一緒に手をつないで1年生の教室まで送り届けている姿も見られました。

これらの行動は、親や先生にそのようにしなさいと言われた訳ではなく、自分で考えてとった行動だろうと思います。そんな高学年の子たちの「思いやり」のある光景を見ると、心が温まります。きっと、手を引いている高学年の子たちも、自分が1年生の時に、通学班のお兄さん、お姉さんに同じことをしてもらっていたのでしょう。そして今の1年生も自分が高学年になった時、同じようにしてくれるのでしょう。

小学校は、6歳から12歳までの子どもたちが同じ学び舎の中で、集団生活を営みます。幅広い年齢層の子たちがともに生活をしているからこそ育まれる「思いやり」の心。子どもたちは、親や先生に教えられなくても、小学校という集団生活の中で、自然と相手を思いやる気持ちや、相手の立場に立って行動する力が育まれています。



「思いやり」の心は教えられるものではなく、育まれるものだと感じました。